

IATSS NEWS

学会通信 国際交通安全学会

- 第9回 IATSS国際フォーラム (GIFTS)開催
- 第64回IATSSフォーラム修了
- IATSS Research Vol. 47, Issue 4 発行

第9回IATSS国際フォーラム(GIFTS)開催

GIFTSの目的

国際交通安全学会は1974年の設立以来、学際的で国際的な研究活動を基軸として、交通とその安全に関わる諸問題に取り組んできました。当学会は、2024年に創設50周年を迎えますが、世界的規模で増大する交通事故やその他交通を取り巻く諸問題に取り組むために、交通に携わるすべての方々が参画する「超学際性: Transdisciplinary」を重視し、国際機関等と連携した活動を強化することに致しました。その活動の一環として、2015年より国際フォーラム“Global Interactive Forum on Traffic and Safety”（略称GIFTS）を開催し、これまで交通とその安全に関わる国際的、超学際的「共創」の場として、多方面の専門家による活発な討議を行ってきました。世界中で交通を取り巻く環境は大きな転換期を迎え、環境、エネルギー、気候変動、健康・安全などの諸領域において、さまざまな実践的取り組みによる諸問題の解決が求められています。従って、それぞれの地域や国の特性や文化的背景に即して交通の役割を検討することが、ますま

す重要になっています。

第9回GIFTSの趣旨

これまでGIFTSでは、「安心で、安全な交通社会は、いかにして実現し得るのか」という問いについて、政策レベルから路上レベルまで、さまざまなレベルで議論を交わしてきました。その中で、交通文化の定義を整理し、道路利用者の行動と交通安全に関わる人や組織の活動を探り、世界各国が共同して交通事故削減に向かうことを議論し続けてきました。もともとGIFTSは、2024年に50周年を迎える我々IATSSが、どのような活動をしていくべきかを議論するプラットフォームとしてスタートしています。その50周年が近づいている今、私たちは、さらに30年先、50年先を見据えることが重要だと考えています。そして、遠い将来の理想を見つめつつ、今何をしていくべきかを議論する必要があります。

過去8回のGIFTSでは、それぞれの地域に住む人々の移動に対する考え方、各地域で、何に重きを置いてモビリティが成り立っているか、その違いに着目して、より

よい交通社会を目指すことが重要であるという視点で議論してきました。その際、各地での違いを「交通文化」として捉えて議論してきました。

本年度の第9回GIFTSでは、「交通文化が支える持続可能な社会」をテーマに、安全で理想的な交通社会の実現に向け、地域のモビリティに対する考え方「交通文化」がより良い形に変容するような取り組みについて議論したいと考えています。安全な交通社会を目指す際のキーワードとなる3E（Engineering, Enforcement, Education）は、技術や制度の変革のみならず、人々の安全性に対する考え方にも影響します。それぞれの地域の人々のモビリティに対する考え方や文化には、それが培われた環境や歴史があり、それを前提とした上で、より安全で、より理想的なモビリティへと人々の行動を変容させるような活動が、世界の多くの地域で実施されています。本年度は、そうした活動やその背景を踏まえつつ、モビリティに関わる全ての主体が具体的にどのような責任を果たしていくべきかについて議論したいと考

えています。また、このような議論が持続可能な社会を構築するにあたり、モビリティの分野からできることを考える際に重要な視点だと考えています。

基調講演1

ニコラス・ウォード
モンタナ州立大学名誉教授、
Leidos上級主席研究員

ニコラス・ウォード氏は「交通安全文化を変える」をテーマに、安全の行動とはどのようなものかを話した上で、死亡事故をゼロにするための取り組みについて講演しました。

まず、交通事故は偶然ではないことから、積極的に取り組むべきだという前提に触れながら、交通安全のための技術や教育では十分な事故の抑制にはならないと強調し、その上で、人が危険につながる行動をしないためのカルチャーについて分析しました。人間は社会的な存在であるため、交通安全のステークホルダーにも社会的環境による影響が大きいとし、その例として、コマーシャルや映画で魅力あるヒーロー的な人は大幅にスピードを出していることが多く、スピードを出すことがかっこいいと思われる現状を挙げました。その上で、社会の意識を変容するためのコマーシャルの可能性について、いくつかの例を示しました。

次に、道路ユーザーの行動に焦点を当てて考察すると、交通安全の文化は行動の変容に関する心理学的理論に基づいており、人々の価値観や信念が安全な行動に影響を与えると提起しました。これを理解するために、インタビューやアンケートを通じて交通安全の文化を定量化して分析することが

要だと説明しました。最終的な目標は、文化の変容を通じて行動の変容を達成し、持続可能な安全な選択肢を提供することであり、文化の変容は自己の信念やアイデンティティを変えるものであり、これにより持続可能な結果が期待されると述べました。

また、安全な行動を促進するためには個々の行動に対するコストを考慮する必要があると、危険な行動が社会的にどのような影響を与えるかを考えることも重要だと説明しました。特定の行動がネガティブなイメージを持つのであれば、規範的な信念を変え、ポジティブな視点を持つような社会的キャンペーンが安全な行動の促進に効果的であると示唆しました。

グループ内での期待される行動や規範は、信念に対して前向きな態度を示すことが重要であり、実際の状況と個人のイメージが異なる場合には、イメージを訂正して誤解を解く必要があると説明し、ミネソタ州での調査を例に挙げ、実際のデータをコミュニティに伝えることで、ポジティブな行動変容が促進されることを示しました。同様に、モンタナ州でも実際のシートベルト着用率が高いにも関わらず、多くの人々がイメージとして低いと考えていた例を挙げ、実際の情報を明確に示すことが、社会全体で望ましい行動を奨励する手段となると述べました。また、イメージのコントロールも大切であり、ニュージーランドのコマーシャルを紹介し、他人に対しても働きかけることが重要だと強調しました。

加えて、コミュニティ内で共有される価値観を理解し、それを利用することで交通安全をサポートできると示しました。具体的な例

として、シートベルトの着用を促進するコマーシャルを挙げ、家族という普遍的な価値観を通じて交通安全をサポートする重要性を示唆していると説明しました。

最後に、交通安全の文化においてアメリカで提案されている「セーフシステム」アプローチを示し、全体として協力して機能する必要があるという理念を示しました。また、主要なステークホルダーや組織が同じ価値観を持つことが重要であるため、セーフティシステムアプローチを価値観として浸透させ、交通事故死亡ゼロを目指していると述べました。

基調講演2

ロッセ・ブロンダム
Global Alliance of NGOs for Road Safety エグゼクティブ・ディレクター

ロッセ・ブロンダム氏は「エビデンスを用い、友人を探そう。持続可能な都市のために」をテーマに、エビデンスにより導いた交通安全のための改善点を示した後に、アライアンスの活動とSDGsなどの活動との親和性について講演しました。

最初に、交通安全グローバルNGOアライアンスの組織について、毎日の交通事故の死亡者数をラジオプログラムで報告している活動を挙げ、その内容を説明。現在、世界人口の55%が都市部に住んでいる状況を示唆し、コラボレーションとエビデンスの必要性を強調しました。

アライアンスでは、都市部での安全な環境を確認するために「モビリティスナップショット」と呼ばれる世界中の交差点の写真を撮影してモビリティとインフラの状況を調査する活動を行っていて、

交通の安全性を向上させるためには、データからのエビデンスが必要であると認識していると説明しました。歩行者事故の多くが交差点で発生していることや、道路の設計が歩行者の安全性を考慮していない場合があることも指摘しました。

この問題に対処するためには、比較的低いコストで改善できると強調し、例えば、歩行者用の交差点を設置することや、交通量緩和対策や減速ランプの導入などを挙げ、具体的な例として、ナイジェリアのアブージャでの交差点の検証結果が紹介され、この活動が都市の歩行者安全性の向上に貢献できることを示しました。

アライアンスがこれらの活動を行う理由は、世界中の多くの人々に、どのような都市に住みたいかを自覚し、その重要性を理解してもらい、行動を起こしてほしいからであるとし、人々に対し、都市に住む上で望ましい状態を考え、そのために声を上げ、エビデンスを提供してほしいと呼びかけました。特に、子供たちが通学や帰宅する際に最も危険な状況が発生することに注目し、そういった状況

の都市が望ましいものなのかを問いかけました。より良い住環境を作り、生活の質（QOL）を向上させるために、コミュニティ全体で行動を起こすことが必要だと強調しました。

後半は、同じ目的を持つ友人を探す重要性に焦点を当てて講演を行いました。交通安全と共同の目標は人々、医療、健康、平等、公正などを優先する文化を作り出すことにつながっていると述べ、これにはSDGs（持続可能な開発目標）との連携も含まれており、他のアジェンダや気候変動などの異なる側面とも結びついていると示唆しました。コミュニティ全体で協力し、SDGsの一環として都市環境を向上させるために、異なる視点と利害関係者とのコラボレーションの重要性を強調しました。

最後に、具体的な例として、車椅子を使う障害のある人々が安全な交通環境にアクセスできるようにする必要性に触れ、SDGsの目標である貧困の撲滅とも関連づけました。自動車事故が貧困のスパイラルにつながる可能性を挙げ、歩行者や自転車利用者の安全性向上が、ジェンダー平等や医療・健

康にも影響を与え、経済的成長にも寄与する可能性がある」と述べ、持続可能な都市環境の構築が重要であると述べました。

パネルディスカッション

基調講演の後、馬奈木俊介氏（九州大学工学研究院教授・IATSS会員）が司会進行を務め、ニコラス・ウォード氏、ロッセ・ブロンダム氏、北村友人氏（東京大学大学院教授・IATSS会員）、リンザ・ウェルズ氏（MDS Traffic Planners & Consultants ディレクター・IATSS フォーラム2004年修了生）を迎え、パネルディスカッションとなり、交通文化・交通安全を示すKPIや持続可能な社会への寄与について活発な議論が行われました。

IATSSホームページ

▶ <https://www.iatss.or.jp/event/list/event29.html>

YouTube

▶ <https://www.youtube.com/watch?v=UGJbTFPDpJY&t=34s>

日時：2023年12月1日（金）14:00～17:00

会場：東京コンベンションホール

国際シンポジウム「交通文化が支える持続可能な社会」

開会挨拶

会長

武内和彦

趣旨説明

国際フォーラム実行委員長

中村彰宏

基調講演1

ニコラス・ウォード

基調講演2

ロッセ・ブロンダム

パネルディスカッション

司会

馬奈木俊介

パネリスト

ニコラス・ウォード

ロッセ・ブロンダム

北村友人

リンザ・ウェルズ

第64回IATSSフォーラム修了

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行による3年間の中断後、再開第2回目となる第64回IATSSフォーラム（2023年秋フォーラム）が、2023年10月1日より、アジア10カ国17名と日本からの1名を加えた計18名の参加により、開催されました。

COVID-19パンデミックが完全収束とはいえない中で、前回第63回同様、感染症防止対策を講じた上で、四日市市の研修施設・ホテルを拠点とし、35日間の短縮研修日程となりました。

持続可能な発展、人間の安全保障、環境、経済、教育、歴史、政治他のセミナーの後、①四日市公害と克服の歴史、②東日本大震災被災地域の復興と防災、③南三陸の復興と循環型社会への取り組み、④伊勢志摩地域振興の4つのフィールドスタディー、また文化交流会等、コロナ禍中断以前と同等の内容を、約半分の圧縮日程で無事修了しました。今回、修了式前日に開催されたIATSSフォーラム国際委員長・事務局会議に参加した各国委員長や事務局長も参列の下、11月2日には全員が無事

修了式を迎えることができました。

従来から継続する「持続可能な地域・社会づくり」をテーマとしながら、今年度から導入された東日本大震災被災地フィールドスタディーにおいて、「復興からの持続可能な地域・社会づくり」という新たな視点、また、その過程で生じたコンフリクト、その解消を目指す地域リーダーの生々しい経験からリーダーシップのあり方を学びました。伊勢志摩の離島小学校では、過疎コミュニティでの小学生による地元再発見・再興の草の根の取り組みを目の当たりにし、自国で同様の課題を抱える研修生に共感とヒントを提供しました。これらフィールドスタディーは、メディアを通じたものではない生の体験として、研修生にとって深い学びの機会となりました。

これらのセミナー、フィールドスタディーを通じて学び得た知見やリーダーシップのあり方を踏まえ、「共に考え、共に学ぶ」実践の場として、各国・各地域での持続可能な発展に向けたグループ研究に取り組み、その成果としての

研究発表会では、各グループより、以下の3つのプロジェクトが提案されました。

1. インド、チェンナイ市における都市型洪水に対する防災対応・教育プロジェクト
2. マレーシア、ジョホール州のパツ・パハットにおける、アメリカミズアブの幼虫を家禽飼料とする低コストかつ循環型・持続可能な農業の普及を目指すプロジェクト
3. タイ国内で最も交通事故死亡率の高いラヨン地域をモデルに、二輪車ヘルメット着用率向上や安全教育により、死傷事故削減を目指すプロジェクト。

これら提案プロジェクトは、帰国後に卒業生会プロジェクトや各地域振興プロジェクトに発展し、具現化されていくことが期待されます。

研修生おのおのが研修中に培われた知識・体験・人との絆を活かし、将来を担う若手リーダーとして成長し、各国・各地域でのさらなる活躍が期待されます。



▲大植町ワークショップ



▲第64回修了式（各国委員長ら来賓）

IATSS Research Vol. 47, Issue 4 発行

IATSS Research Vol. 47, Issue 4が発行されました。

Elsevier Ltd.のサイトより、無償で全掲載論文のダウンロードが可能です。

Vol. 47, Issue 4

▶ <https://www.sciencedirect.com/journal/iatss-research/vol/47/issue/4>

<General Topics>

Hossein Naderi, Habibollah Nassiri

How will Iranian behave in accepting autonomous vehicles? Studying moderating effect on autonomous vehicle acceptance model (AVAM)

Kyoungmin Kim, Keisuke Matsushashi, Masahiro Ishikawa

Analysis of primary-party traffic accident rates per driver in Japan from 1995 to 2015: Do older drivers cause more accidents?

Charles Atombo, Richard Fiifi Turkson, Maxwell Selase Akple

Estimating injury severity for motorized and non-motorized vehicle-involved crashes: Insights from random-parameter ordered probit model with heterogeneity in means and variances

Dang Minh Tan, Le-Minh Kieu

TRAMON: An automated traffic monitoring system for high density, mixed and lane-free traffic

Jue Li, Zhiqian Hu, Long Liu

A survey on public acceptance of automated vehicles across COVID-19 pandemic periods in China

Ramina Javid, Eazaz Sadeghvaziri, Mansoureh Jeihani

Development and evaluation of a Bayesian network model for preventing distracted driving

Apostolos Ziakopoulos, Christina Telidou, Apostolos Anagnostopoulos, Fotini Kehagia,

George Yannis

Perceptions towards autonomous vehicle acceptance: Information mining from Self-Organizing Maps and Random Forests

Abbas Sheykhfard, Farshidreza Haghghi, Shahrbanoo Kavianpour, Subasish Das,

Parsa Soleyman Farahani, Grigorios Fountas

Risk assessment of pedestrian red-light violation behavior using surrogate safety measures: Influence of human, road, vehicle, and environmental factors

Narayana Raju, Shriniwas Arkatkar, Said Easa

Receptiveness angle: A new surrogate safety measure for monitoring traffic safety

Hiroaki Nishiuchi, Charitha Dias, Satsuki Kawato

Empirical evaluation of change in crash risk due to lane marking reallocation: A case study in Kochi City, Japan

Someswara Rao Bonela, B. Raghuram Kadali

Examining the effect of vehicle type on right-turn crossing conflicts of minor road traffic at unsignalized T-intersections

Bh. Aaditya, T.M. Rahul

Analysis of trip frequency choice of commute trips in the context of COVID-19 in India: A hybrid choice modelling approach with generalized ordered logit kernel